

令和元年度版

市川市の教育

人をつなぐ 未来へつなぐ 市川の教育



市川市教育委員会



いつも新しい流れがある いちかわ

目 次

市川市の概要	2
第1章 教育行財政	4
第1節 教育委員会	5
第2節 組織及び事務分掌	11
第3節 教育財政	15
第4節 第3期市川市教育振興基本計画	16
第2章 学校教育	18
第1節 令和元年度学校教育の指導方針	19
1 幼稚園 編	
2 小・中学校、義務教育学校 編	
3 特別支援学校 編	
第2節 コミュニティ・スクール	32
第3章 生涯学習	34
第1節 生涯学習の推進	35
第2節 家庭・学校・地域の連携推進	37
第3節 学校施設の開放	41
第4節 青少年の健全育成の推進	42
第5節 文化財の保護と活用	51
第4章 教育機関	52
1 市川市生涯学習センター（メディアパーク市川）	53
2 市川市教育センター	55
3 市川市立図書館	58
4 市川市公民館（社会教育課）	65
5 市川考古博物館	68
6 市川歴史博物館	70
7 市川自然博物館	72
8 市川市少年自然の家	74
資料編	76
I 学校施設関係	77
II 学校教育関係	93
III 生涯学習関係	110

市川市の概要

1 市川市の沿革

市川の地域に人々が住みはじめたのは今から約2万年前にさかのぼるといわれる。当時の市川は海と陸地に二分され、前者は現在の市川、八幡、中山、行徳、南行徳など市の南側の地域や低地が相当し、後者は貝塚などの遺跡の多い北側の台地すなわち須和田、国分、中国分、北国分、曾谷、大柏等が相当する。縄文時代、人々は海辺に近い場所に住居を構え、海と陸地からそれぞれの幸を食糧として生活し、相当大きな集落を形成していたと思われる。これら祖先の歴史は、堀之内、曾谷及び、姥山といった大貝塚をはじめ数多くの貝塚やその他の遺跡により知ることができる。

7世紀、大化の改新の後、今の国府台周辺に下総国を統治するために国府が設けられ、その後聖武天皇の代（天平14年）に国分寺が全国60余カ国に建立されることになり、下総国の国分寺は現在の市川市国分に建てられ、国分、国府台周辺を中心に非常に発展したものと考えられる。

江戸時代になると、幕府直轄の所領は寺社領等に属したが、廃藩置県後の明治6年、千葉県所管となった。同22年市制、町村制の施行により、市川町、八幡町、中山村及び国分村に分立したが、大正13年に至り中山村が町制を施し、昭和9年11月3日、市川町、八幡町、中山町及び国分村とが合併して市制を施行した。千葉県では、千葉市、銚子市について3番目の市、当時の人口は約4万だった。更に昭和24年11月3日大柏村、昭和30年3月31日行徳町、昭和31年10月1日南行徳町をそれぞれ合併した。

また、京葉工業地帯開発の一環として昭和32年以降51年1月まで公有水面埋立事業を行い、二俣新町、高谷新町、千鳥町、高浜町、塩浜、東浜、新浜3丁目がそれぞれ市域に編入され、現在（平成30年10月1日）市の面積56.39Km²、人口492,752人となっている。

2 位置・地勢

市川市は、千葉県の北西部に位置し、北は松戸市、東は船橋市、鎌ヶ谷市、南は浦安市及び東京湾に各々面し、西は江戸川を隔てて東京都江戸川区及び葛飾区と相對している。都心部と県内各地域を結ぶ広域交通網の集中する位置にあり、東西方向はJR総武線をはじめとする7路線の鉄道や、京葉道路、国道14号などの都市計画道路が整備されている。

市川市の地形は、北部から南部に向かってやや傾斜しているが概して平坦であり、北部は標高20m程度の台地、南部は標高2m程度の低地帯を形成している。台地は粘質壤土、低地は砂質壤土である。

北部には梨栽培などの農業が盛んで屋敷林などの緑も多く、また私立の幼稚園、小・中・高等学校、短大、大学なども多い文教・住宅都市である。南部は東京湾に臨み、京葉工業地帯の一翼を担っているとともに、新しい都会的な住宅都市が形成されている。



